

「ここ、本当に評判いいから行ってみなよ。セラピストさんたちがみんなすごく上手で、私もリピートしてるんだ」

同僚からそう強く勧められたのは、先週のこと。連日の残業で私の身体はもう限界だった。

（スパなんて贅沢かなって思ったけど、紹介チケットで半額で試せるらしいし。せっかくだし……）

都心の高級ホテルに併設されたそのサロンは、入り口からして非日常のオーラが漂っていた。

案内された施術室は、間接照明の柔らかな光が揺れる、幻想的な空間だった。

（わぁ……すごい。アロマのいい香りがして、なんだかここだけ日常から切り離されたみたい。……でも、なんだか空気が甘い感じがして、ちょっとドキドキしちゃうかも……っ）

コンコン、と控えめなノックの音が響く。

「本日担当させていただく成瀬です。よろしくお願いしますね」

カーテンをさらりと開けて入ってきたのは、ふわりと柔らかい空気を纏った、驚くほどのイケメンだった。

「よろしくお願いします」

（あ、この人が成瀬さん？ 言ってた通り、すごいイケメン……でも、話し方がすごくフラットで、なんだか不思議な安心感があるかも……）

「事前のお話だと腰の痛みがひどいとのことですが、心当たりはありますか？」

「あの、一応事務仕事なので……」

「あー、なるほど。それなら全身から見ていきましょうか。お着替え、そちらの更衣室でどうぞ」

成瀬さんの喋り方はフラットで、どこか色気があ

る。そっと背中を押され、「中に着替えがあるのでそれを着たら出てきてくださいね」と囁かれ、ドキドキしながら更衣室に入った。

(……よし。まずは、着替えなきゃ)

私は大きく深呼吸をして、脱衣スペースへと向かった。

だけど、カゴの中に入っていたのは紙でできた薄い下着だった。

(う、嘘……これだけ？ 下着、紙のやつしかないんだけど……っ。これ、ほとんど裸じゃない……！？)

姿見に映る自分の肌の露出量に、もじもじと太ももを寄せる。

「大丈夫ですか？」

「あっ、はい！ 今出ます……っ」

そっと腕で身体を隠すようにして出ると、成瀬さんは「どうぞこちらに」と事もなげにベッド台を示した。

（そうだよ、プロの人には見慣れた光景なんだ……。私が自意識過剰なだけ……）

自分に言い聞かせて横になる。

「では始めていきますね」

「は、はい……っ」

成瀬さんは温かいタオルで手を温めながら、淡々と順序を説明していく。オイルを掌の上で温めて、ぬちゅ、という音とともに、その手が肩に触れた。

「っ……あ……っ」

「痛みとかあったらすぐ言ってくださいね。大丈夫ですか？」

「だい、じょぶ……です……っ」

肩から背中を丁寧に解され、身体がじわじわと熱くなっていく。

「ん、ふう……っ」

(あ、気持ちいいかも……)

じっくりとマッサージされ、あまりの気持ちよさに私はほとんど眠りかけていた。

「よし、じゃあ次はオイル使って、前の方も流しちゃいましょうか。仰向けになってもらえますか？」

成瀬さんはそう言うと、ベッド台の横にあるオイルのボトルを手を取った。カチ、という小さな音が、静かな室内にやけに響く。

「あ、わかりました……」

(仰向け、ちょっと恥ずかしいな……)

そう思いつつも、私は言われた通りに仰向けにな

った。「では失礼します」と言い、成瀬さんが首筋の辺りから下へと指を滑らせていく。

不意に、脇腹から胸の際をすりすり♡と指が通った。

「あ、んんっ」

たまたまかと思ったけれど、胸のギリギリ横を、指が何度も前後していく。

「ふ、あ……あ、っあの、ん、くう……」

「……痛かったですか？」

「え、っ……あ、痛くは……ん、ふあ……あ、あっ」

際どいところをすりすりっ♡ぬるぬるっ♡とされ、足先がもじもじと揺れて、おまんこの奥がきゅんっと疼く。

「それならよかった」

「で、でも、んっ……ああ、う、う」

「施術後はみなさん施術前よりもずっとスッキリなさるんですよ。たくさん気持ち良くなってくださいね。血流がよくなって、効果的ですから」

（そ、そうなの……？）

「う、……あっ……は、い……」

「またオイル足しますね。……失礼」

とろり。ぬりゅ♡ぬりゅ♡ぬりゅ♡

10本の指先が、おっぱいの周りを撫でるように、何度も何度もぬりゅぬりゅっ♡と動く。

「ああ……ん、んっ！ う、くう、んん……っ」

ねっとりとした愛撫のような動きに、私の心臓はうるさいくらいに跳ね上がった。

「んんっ……あ、は、あ……。な、なるせ、さん……っ」

「ん？ どうしましたか。……ああ、ここ、リンパが詰まってますね。少し念入りに流しておきますか